

鉱山再生

はぐく

森を育む、 まちを育む

郷土の自然を愛する市民の願いのもと、
『人と自然のふれあい拠点』である鉱山地区に
ネイチャーセンター『ふおれすと鉱山』が誕生して、
2年の歳月が流れました。
今月号の特集は、
鉱山町の歴史と美しい自然をご覧いただくとともに、
ふおれすと鉱山の設立の背景、運営方針、事業などを
ご紹介します。

ふるさとの自然を愛する 市民の思い

「ふおれすと鉱山の誕生と

これまでの歩み」

『ふおれすと鉱山』建設までの経過をさかのぼると、平成元年、国の『ふるさと創生事業』を契機に誕生した市民組織『いきいき人とまち推進会議』の『こんなまちにしたい提言書』（平成6年3月刊行）に至ります。

この提言書では、自然をテーマとしたまちづくりの議論や自然の調査結果を取りまとめ、鉱山地区を『身近な自然や野性味のある自然の宝庫』『子どもの環境教育に最適の場』と位置付けています。



また、鉱山地区の適正な自然の利用や保全、創造を考え、環境教育を進めるための人材育成・ネットワークづくりや環境に配慮した整備のあり方などをまとめた『鉱山の自然の村づくり構想』を描き、登別の自然環境の情報の発信源としての中心的な役割をもつ施設として『ネイチャー

センター』の必要性を説いています。

平成8年に策定した『登別市総合計画』では、鉱山地区を『人と自然のふれあい拠点』とし、その中核的な役割を担う施設・ネイチャーセンターの建設を主要な施策の一つとしました。

平成9年からは、市は『鉱山地区整備調査』を実施するとともに、鉱山地区の整備のあり方やネイチャーセンターの基本プランを検討する『市民懇話会』を設置。平成11年6月には同懇話会より、提言書が提出され、鉱山地区を自然環境の尊さ、大切さを学び、次代に継承する意識を育むためのセンターと位置付け、ネイチャーセンターの担うべき役割・機能や運営の方向性が示されました。こうして、ふるさとの自然を愛し、子どもたちに手渡したいと願う市民の強い思いのもと平成14年4月25日、登別市ネイチャーセンター『ふおれすと鉱山』がオープンしました。

以来、自然愛好団体や地域の理解と協力のもと、市民・NPO法人・市の協働という形で運営されています。オープンから2年を経た今、利用者は約2万7千人（平成14年4月～16年3月）を数え、総合的な学習の時間など学校教育の場として積極的に利用されるなど、自然に親しみ、自然を学び、はぐくむためのかけがえのない施設となっています。